

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年5月22日現在

機関番号：24403

研究種目：基盤研究C

研究期間：2010年度～2012年度

課題番号：22520186

研究課題名（和文） 懐徳堂の和学の研究

研究課題名（英文） A Study of *Kaitokudo* Learning
 研究代表者 西田 正宏 (NISHIDA MASAHIRO)
 大阪府立大学・人間社会学部・教授

研究者番号：00305608

研究成果の概要（和文）：

懐徳堂の助教であった五井蘭洲による古典の注釈書、例えば、『古今通』や『勢語通』などを中心に、その和学の特徴、および学芸史上における意義について検討した。直接の影響を与えた契沖の注釈書、および地下歌人らの著作について考察し、従来、契沖から宣長へと一足飛びに論じられることの多い「上方学芸史」に、懐徳堂の和学、特に蘭洲の著作を加えることで、よりいっそう、その流れを具体的に、精緻に把握することが可能になった。

また、その結果、学芸史の埒外に置かれていた上田秋成の学芸について、再検討すべきことが、今後の課題として浮かび上がることになった。

研究成果の概要（英文）：

This project has studied the significance of Goi Ranshu's work, focusing on his commentaries including Kokintsu and Seigotsu. By thorough consideration of his own work, as well as preceding relevant works by Keichu and contemporary "common poets", our study successfully filled the gap between Keichu and Norinaga and presents a more sophisticated view of "the history of Kamigata learning". The renewed view now suggests the need to re-evaluate Ueda Akinari, whose work has mostly been ignored in the literature.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	500,000	150,000	650,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
2012年度	400,000	120,000	520,000
年度			
年度			
総計	1,400,000	420,000	1,820,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学（日本文学）

キーワード：懐徳堂・学芸史・和学

1. 研究開始当初の背景

応募者はこれまで中世から近世前期にかけての、主に、上方地下歌人の学芸史について研究を進めてきた。従来の研究は、上方の学僧・契沖にのみ、焦点が当てられ、「古典学」の達成は、契沖その人の個性に還元されてきた感が否めない。「上方学芸史」を契沖ひとりに代表させてきたのである。ところが、実際に現代の注釈書でもしばしば取り上げられる契沖の説が、同時代の地下歌人の注釈書に説かれている説とほとんど変わらない場合もあるのである。ならば、現代の研究にも通用するような、その学問の達成は、ひとり契沖の個性に還元されるものではなく、言わば「時代の達成」としても捉えられよう。広く近世前期（元禄期くらいまで）の「文化史的環境」という視点から、改めて「古典学」も捉えられるべきなのである。

そのような観点から彼らの学芸（学問と文芸）について、個別、具体的に検討を加え、研究史上、等閑にされてきた彼らの学芸史上における意義について考察を進めてきた。その成果は、『松永貞徳と門流の学芸の研究』（2006年2月、汲古書院）として刊行した（2005年度科学研究費補助金＜研究成果公開促進費＞・課題番号175116の交付を受けた）。

また近年は、その契沖の注釈の享受（評価）を軸に、それを新たな上方学芸史へと発展させるために、懐徳堂の和学について特に古今和歌集の注釈を中心に考察を深めてきた。

契沖から本居宣長を中心とするいわゆる＜国学＞へと学芸の流れが急に移行するのではなく、その間には、地下歌人を中心とする注釈の蓄積や、五井蘭洲を中心とする懐徳堂の和学が見直されなければならないのである。

このことについては、2005年3月に『古今通』の方法―＜上方＞学芸史一斑―（『都市問題研究報告書』第3分冊『都市文芸の東西比較』pp.17～26、大阪市立大学プロジェクト研究会）という論文をまとめており、大雑把ながら、見通しをつけておいた。

しかし、『古今通』の伝本研究を含めた基礎的研究を先学によっていることもあり、不十分な点があったことは否めない。そこで2007年に、研究の十分でない『古今通』の伝本の調査、注釈内容の検討、さらに翻刻を目的に科学研究費を申請し、採択された（基盤研究C「上方学芸史の研究」、課題番号19520161）。なお、その一部は、上方文化研

究センター研究年報第10号に『古今通』夏部四本対照翻刻』として公刊した（2009年3月）。

前掲の契沖の『古今餘材抄』の享受については、本居宣長の『古今集遠鏡』との対比を論じるなかで、『古今通』（蘭洲本）についても言及した（『古今集遠鏡』と『古今餘材抄』、『文学史研究』第48号、2008年3月、大阪市立大学国語国文学研究室文学史研究会）。

如上の研究を通して、古今和歌集の享受、注釈を中心とした、従来とは違う「上方学芸史」を描くことができると思われる。古今和歌集の注釈のみを取り上げるとは、故のないことではない。そこに堂上方で綿々と続いてきたいわゆる「古今伝授」を対比させれば、堂上と地下における学芸の違いとその達成についても一定の知見を得ることができ、従来とは全く違う視点からの学芸史が構想できるのではないかと考えるからである。

既に述べてきたように、従来は契沖ひとりが、言わば、過大評価されるなかで研究が進められてきたのであって、その先にいわゆる＜国学＞の歴史を積み重ねてきたのである。現在の私の研究は、その反省に立って、地下歌人の学芸の達成を見究めた拙著のさらなる発展を目指すものであり、未開拓の資料を駆使し、従来の学芸史に、日本文学史の立場からも、日本文化史の立場からも、一石を投じるべく、努力している。

先の科学研究費によって五井蘭洲の古今集注釈書『古今通』の基礎的な研究に着手したが、いまだ完結しておらず、その完成を目指すとともに、そこで得た知見をもとに、新たに伊勢物語の注釈書『勢語通』や『詠歌大概』の注釈書などにも、研究範囲を拡大して従来省みられることの少なかった「懐徳堂の和学」の究明に取り組むことにした。

2. 研究の目的

本研究は、「懐徳堂の和学」について、主に文献学的見地から解明を試みることを目的とした。思想史からの検討は不十分ながら、なされてきたものの、文献に関する目配りが十分ではないように思われる。

特に五井蘭洲や加藤景範の著作・書き込みを中心に基礎資料の翻刻、紹介、上方学芸史上への定位など、基礎研究を中心としつつ、蘭洲の和学の解明を目的とする。

3. 研究の方法

ほとんどの資料が未翻刻であり、まず主要伝本の調査、基礎文献の翻字・読解を中心に行った。具体には、『古今通』の主要伝本四本の翻字・読解、大阪府立中之島図書館所蔵の「雑纂」、『詠歌大概紀聞』、『古今序紀聞』などの翻字・読解。またこれらの注釈を注釈史の流れに置き直し、先行する注釈書と比較検討することで、その学芸史における位置づけについて、考察した。

従来は、注釈史において、その影響関係にばかり関心がむき、蘭洲の著作としては、十分に検討されて来なかった『勢語通』について、蘭洲の他の注釈書とも比較し、蘭洲の文芸思潮を探るべく努めた。

4. 研究成果

初年度は、五井蘭洲著古今集注釈書の『古今通』の翻刻を継続して行い、さらにその注釈書を古今和歌集注釈史上に位置づけるべく、他の注釈書との比較研究、並びに伝本間の比較研究を行った。大部なものであるため、時間はかかったが、ようやく全体が見渡せるところまでできた。その『古今通』の基盤には、契沖の学芸があり、特にその契沖の注釈方法について百人一首の注釈書を題材に検討し、論文としてまとめた（「契沖『百人一首改観抄』再考」）。

また大阪府立図書館所蔵の懐徳堂関係書籍の調査を行った。活字化するにはさらに広く伝本の調査などを進める必要があるが、歌学を中心に様々なことについて、覚書風に記した「雑纂」を翻字した。

二年目も、昨年度に引き続き五井蘭洲著の古今和歌集注釈書『古今通』の翻刻を継続して行った。特に本年度は伝本によって大きく異なっている「仮名序」の部分、伝本間の比較を行うとともに、他の注釈と比較し、その影響関係についても検討した。

加えて大阪府立中之島図書館に蔵せられている同じ蘭洲著の古今集の仮名序の注釈である『古今序紀聞』を翻字するとともに、『古今通』との比較研究を行った。

これらの作業を通して、ようやく『古今通』の『古今和歌集』注釈史上における位置づけが明らかになった。この点については、WEB上で公開予定の辞典の項目として簡略にまとめたが、研究論文としても発表することを目指している。

『伊勢物語』の注釈書である『勢語通』についても、その内容検討を進めてきたが、2011年11月に片桐洋一氏蔵本と大阪大学懐徳堂文庫所蔵本が田中まさ氏によって翻刻、刊行され（和泉書院）、今後は、この成果を

踏まえての考察が必要となった。

『詠歌大概』の蘭洲の注釈書である『詠歌大概紀聞』については、翻字をはじめた。

なお『古今通』の検討を通して、改めて、当時の古今伝授の具体の様相が課題として浮かび上がってきた。その点については、さかのぼって古今伝授そのものの意義を問う論文（「切紙とは何か—古今伝授「三鳥」をめぐって」）を発表した。

三年目も、昨年度に引き続き五井蘭洲著の古今和歌集注釈書『古今通』の翻刻を継続して行った。

本年度は伝本によって大きく異なっている「仮名序」の部分について代表的な伝本である大阪府立中之島図書館蔵本・ノートルダム清心女子大学附属図書館正宗敦夫旧蔵本・国会図書館本・国文学研究資料館初雁文庫本の四本の対照翻刻し、刊行した（上方文化研究センター研究年報14号）。

また、大阪府立中之島図書館に蔵せられている同じ蘭洲著の『古今序紀聞』『詠歌大概紀聞』についても翻字はすませたが、ともに今のところ他に伝本が知られないため、本文に不審な点を残しているの、公刊には至っていない。今後の課題である。

特に本年度は縁あって、「懐徳忌」で講演する機会を得た。この科学研究費の総まとめとして、「五井蘭洲の和学」と題して、講演した。加えて懐徳堂記念会の刊行する『懐徳』81号（2013年2月刊行）に「蘭洲の和学—『古今通』をめぐって—」という論文を投稿し、審査のうえ掲載された。

懐徳堂の和学を代表する五井蘭洲の和学について、『古今通』を中心に、『勢語通』などとも比較検討し、その学の特徴や文芸思潮について考察した。

三年間の科学研究費の成果として、契沖から本居宣長へと一直線に記述されることの多かった従来の学芸史に新たな知見を加えることができたのではないかと思われる。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計4件）

①西田正宏、蘭洲の和学—『古今通』をめぐって—（『懐徳』81号（懐徳堂記念会、2013年2月、pp.6~18）、査読あり）

②西田正宏・池上保之『古今通』仮名序 四本対照翻刻（『上方文化研究センター研究年報』第14号、2013年3月、pp.11~73、大阪府立大学上方文化研究センター）、査読なし。

③西田正宏、契沖『百人一首改観抄』再考(『言語文化学研究 日本語日本文学編』第6号 pp.67~77、2011年3月、大阪府立大学人間社会学部言語文化学科刊)、査読なし。

④西田正宏、偽書の出版(『文学』特集=十七世紀の文学、岩波書店、2010年5,6月号、pp.44-57)、査読なし、依頼論文。

[学会発表](計1件)

①西田正宏、五井蘭洲の和学—『古今通』を中心に—、2012年4月7日、懐徳堂記念会、懐徳忌講演(於・誓願寺(大阪府))。

[図書](計4件)

①西田正宏、切紙とは何か—古今伝授「三鳥」をめぐって(前田雅之編『中世の学芸と注釈』、竹林舎、2011年10月、pp.366~386)

②西田正宏、後水尾天皇と同時代の地下歌人たち—江戸時代前期(鈴木健一・鈴木宏子編『和歌史を学ぶ人のために』、世界思想社、2011年8月、pp.163~177)

③西田正宏、幽斎(学)の享受(鈴木元他編『細川幽斎—戦塵の中の文芸』、笠間書院刊、2010年10月、pp.343-357)

④西田正宏、古典注釈の変容と展開—『女郎花物語』をめぐって—(鈴木健一編『江戸の<知>—注釈の世界—』、森話社刊、2010年10月、pp.88-103)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

西田 正宏 (NISHIDA MASAHIRO)
大阪府立大学・人間社会学部・教授
研究者番号：00305608

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし